



湯まつり『源泉お湯かけ合戦』(2月4日)



郷土資料館体験学習『和菓子づくり体験』(3月3日)

未来のノーベル賞候補者たち

登別に住んでいながら地元のことをあまり知らないで、ガイド見習いとして小学3年生の郷土学習・野外研修会に同行させていだいた。

秋も終わりに近づき少し肌寒い日だったが、子どもたちは弁当を背に声を弾ませて温泉地を歩いていた。

ガイドさんが一生懸命話をしている時に『奥の湯』から流れ出た湯の中にポイと石を投げて遊んでいた子がいたが、その子が「あれ、石が溶けてしまった」と叫んだ。

すると数人の子が勝手に集団から離れてきて、同じように石を湯の中に投げ入れて「ほんとだ、このお湯はすごく熱いんだな」と、かなりの高温を推測する。次に「オマエも手を入れてみれ」と火傷を覚悟しておっかなびっくり湯を指で触ってみる。そして「なんだ、そんなにあつくはないわ」と不思議そうに顔を見合わせた。それから投げた石を掴み出し「なんにも溶けてないな、泥が流れたんだ」「色が似てるからまちがえたんだな」と、この状況に納得してうなずいていた。

いたずら坊主の集まりかと思っ

たが、彼らは観察・実験を大切に
する未来のノーベル賞候補かも知
れない。湯気に覆われた大湯沼か
ら立ち去ろうとしている旅のオジ
サンに、わざと聞こえるような声
で「上から見ると、沼のまん中が
輪になっていて、あそこだけゆげ
が出てないんだよなあ」と自然の
神秘を話しているかわいい広報員
もいた。

散策路では、数多い落ち葉の中
に半分だけ色が変わっている葉を
見つけて喜んだり、大岩を見上げ
て「ゴリラがいばってるみたい
だ」と想像力を働かせるロマンテ
イストがいて集団がスムーズに動
かなこともあった。

時間が限られた学習で先生方は
大変だなあと思ったが、好奇心あ
ふれる子どもたちと出会えて楽
しかった。

(美園町/西巻弘光さん・66歳)

『ふおれすと鉱山』・ 何度も足を運びたくなる 施設と環境を目指して

登別市ネイチャーセンター『ふ
おれすと鉱山』として新しくなっ
たのが昨年の4月で、専門家スタ
ッフを3人配置してのスタートで
した。ふおれすと鉱山はオープン
以来老若男女、たくさんの方の市
民の方が来館しています。

支援ボランティア組織『モモン
ガくらぶ』は市民懇話会のメンバ
ーが中心となり、昨年9月正式発
足。現在の会員数は52人で、下は
小学生から上は大正生まれとかな
り幅広い年齢層となっています。
モモンガくらぶはネイチャーセ
ンターに対する人的支援はもちろ
ん、独自の事業などを展開してい
くことを主な目的に活動をしてい
ます。

今年には鉱山町のポテンシャルを
充分生かした事業や周辺の調査、
整備などを計画的に実行してい
きます。何度もふおれすと鉱山に足
を運びたくなる施設や環境になれ
ばいいなあと思います。

ふおれすと鉱山とその周辺はリ
ラックスするにはとてもいい素材
がそろっています。その素材を生
かすも殺すもここに来た人次第で
す。
(新生町/松原條一さん・ももん
がクラブ会長)



ネイチャーセンター『ふおれすと
鉱山』